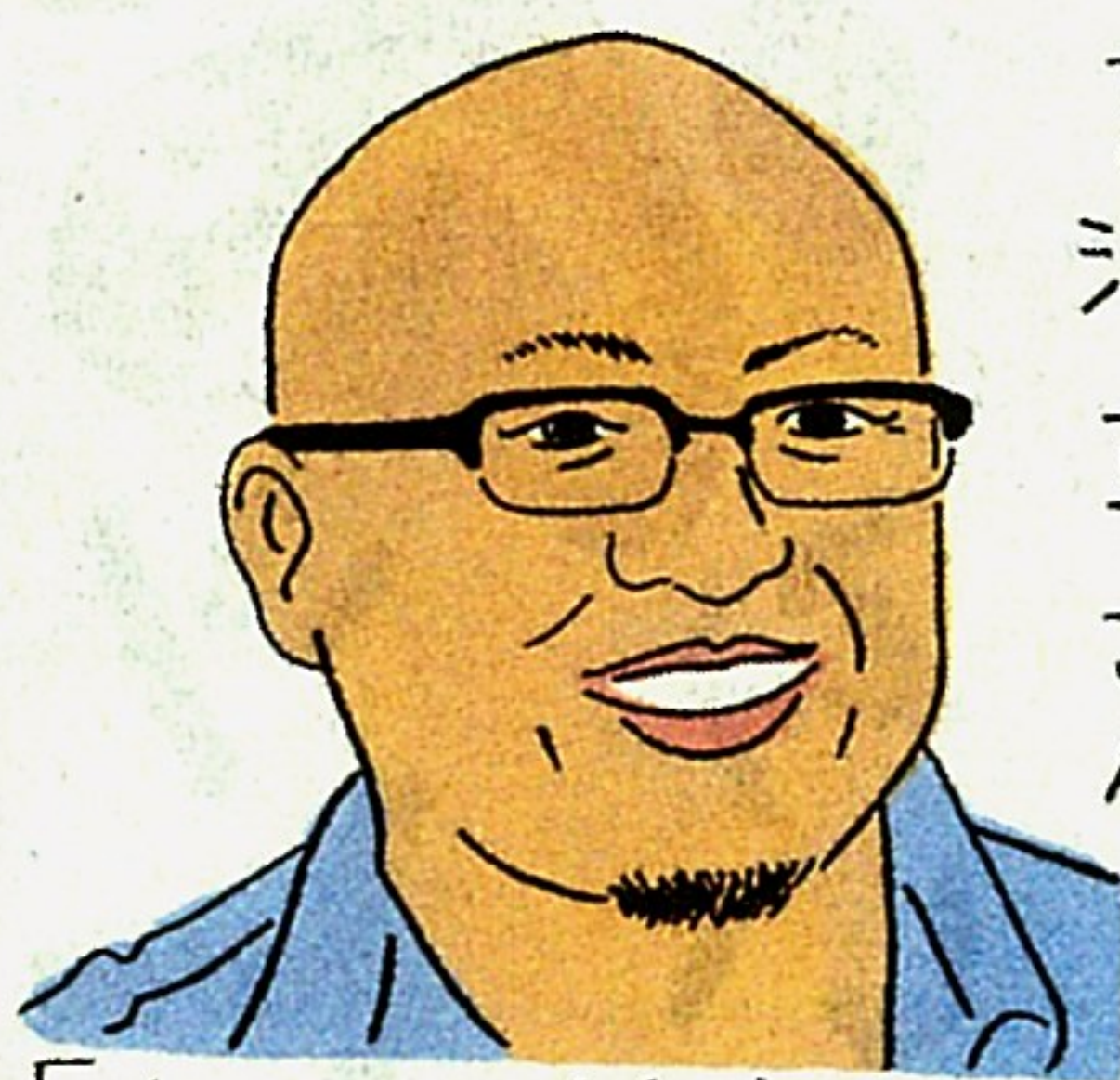


本の仕事場

紙にインキで活字や絵を刷る。書籍の印刷は単純な工程だと思われがちだが、職人の技と最新技術を駆使した高度な作業が欠かせない。創業104年の印刷会社「精興社」の朝霞工場（埼玉県朝霞市）を訪ね、絵本づくりの奥義を教えてください。（淵上えり子）

同社は活版印刷の時代から技術力に定評があり、筆文字のように優美な「精興

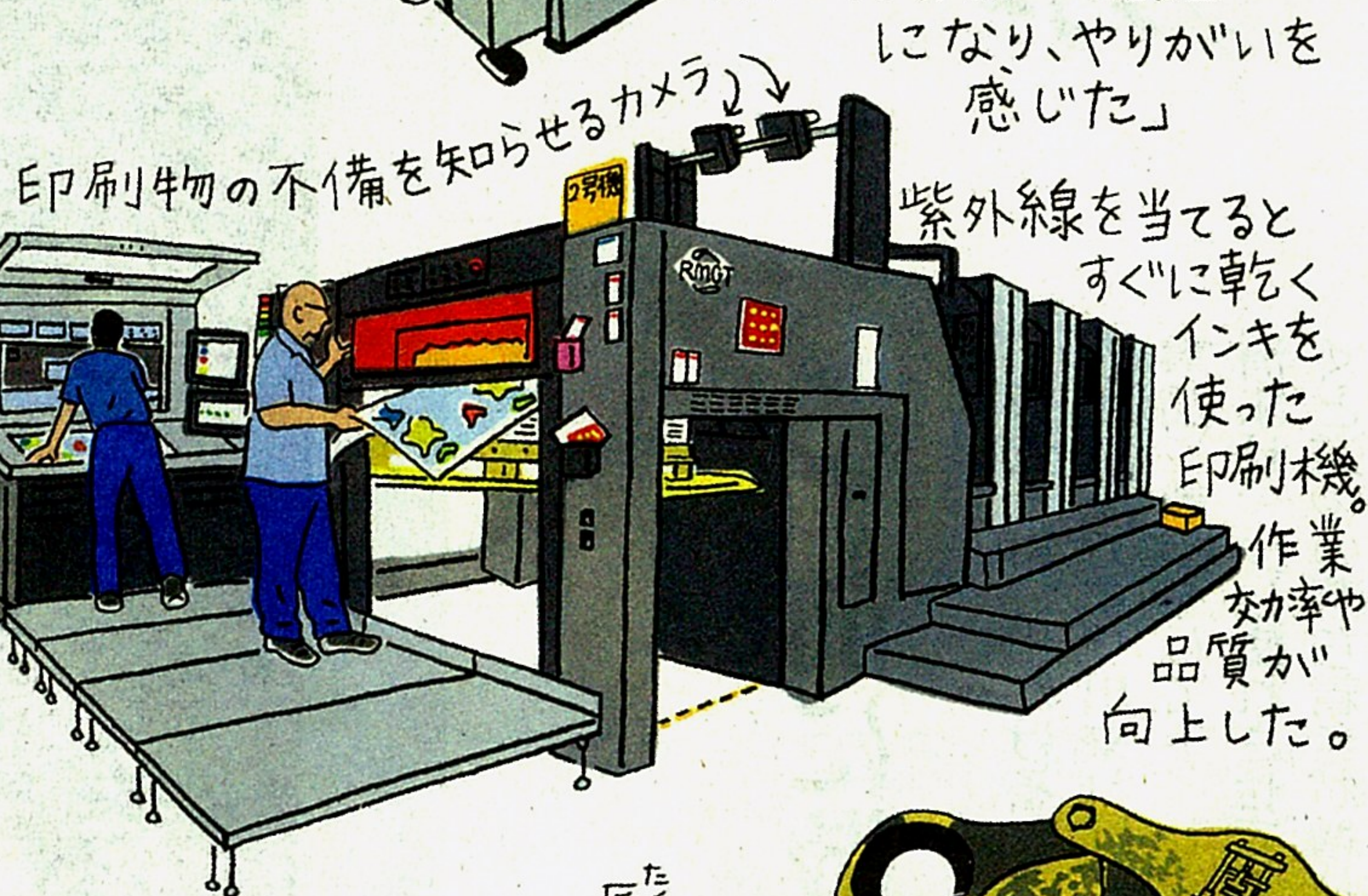
精興社朝霞副工場長 芹澤真さん



「手がけた絵本が娘の保育園で話題

になり、やりがいを感じた」

高精度のドラム型スキャナーで絵本の原画などを入力し、色やバランスの調整を行う。（※スキャンは神田事業所で）



特殊な色は、職人がヘラでインキを練って作り出す。



匠の技！



上司から受け継いだ「ルーペ」で、印刷の仕上がりをチェック！

イラスト・田中未樹

色調 最後は人間の感覚で

社書体」を開発したことで知られる。現在は東京都青梅市の本社で主に文字を、朝霞工場でカラフルな絵柄を印刷している。副工場長の芹澤真さん(44)は入社26年目。従業員を指導する立場だ。「絵本づくりは子供に夢を与える仕事。身が引き締まります」

印刷業界では「インク」のことを「インキ」と呼ぶ。基本は黒、藍、赤、黄の4色で、足りない色は職人がインキをヘラで練って作る。あめ細工のようにすすいすい混ぜているが、かなりの力仕事のようなのだ。「機械を使った時期もありましたが、水分量などの条件が変わると色が均一にならない。数値よりも見た目重視。自在に色を作れるのが我が社の強みです」

音が鳴り響く光景を想像していたが、案外静かだ。紙やインキの状態を一定に保つため、室温が25度前後、湿度は約55%に設定されて「紙がこすれて汚れるトラ

ブルを防ぎ、短い納期にも間に合うようになった」色調や印刷のズレを検査するカメラも備え、1枚ずつチェックしている。従来型の印刷機4台については、検査専門の職人が目視で確認する。機械化が進んでも、職人の技をなくして美しい絵本は完成しない。芹澤さんは、ロングセラーの絵本『ぐんぱのようちえん』（福音館書店）の印刷を初めて任された時の緊張感を今でも覚えているという。「数十年間、歴代の職人が引き継いできた色調を守らなくては、と大きな責任を感じた。色の調整などの最終的な判断は人間の感覚にかかっている」と語った。

● 精興社が印刷した本の例

- ①『谷崎潤一郎全集』（中央公論新社、全26巻） 文学全集は長年、取り組んできた得意分野。全巻を並べた時に背表紙の色に違いが出ないように、慎重を期すという。
- ②作・中川李枝子、絵・大村百合子『ぐりとぐら』（福音館書店） 今月で第217刷となったロングセラー絵本。原画の素朴な筆触を忠実に再現することを目指している。
- ③トーン・テレヘン著『ハリネズミの願い』（新潮社） 今年、「本屋大賞」の翻訳小説部門を受賞した。独自開発の「精興社書体」を活字に使い、柔らかい印象を与えている。